

懸賞作文

「特集・日中笹川医学奨学金制度 20 年」を組むにあたり、「私にとっての日中笹川医学奨学金制度」をテーマとする懸賞作文を本奨学金制度の研究修了者、第 1 期生～第 30 期生を対象に募集したところ、50 編の応募があった。広報委員会による厳正な審査の結果、3 名の入賞者を決定した。入賞者には 2010 年 1 月 16 日（土）中国雲南省昆明市で開催される笹川医学奨学金進修生同学会学術交流会において、懸賞金 5 万円と賞状が渡される。ここに入賞作品を紹介する。

懸賞作文・入賞作品

私にとっての日中笹川医学奨学金制度

孫貴範¹

中国医科大学公共衛生学院教授



私は瀋陽発北京行きの D4 次快速列車に乗っている。速度表示板をみると、列車の時速はもう 250 キロに達している。なぜか 20 年前日本に留学していたときに東京から大阪行きの新幹線に乗ったときの感覚が蘇った。帰国後、中国の経済発展の速さを感じながらも、知らず知らずのうちにさまざまな場面で中国と日本を比較してみるようになっている自分がある。すべてが 20 年以上前の日本の留学生活から始まったのである。それは本当に私の人生にとって一里塚のようなものだ。

1987 年、中国は改革開放が始まったばかりで、人々の生活のレベルや質は今日とは比べようもないが、基本的な衣食は足りていた。農民は自分の土地を持つようになり、都市住民も安定した職業と収入を得て、貧富の差はそれほど大きくなかった。大学生のほとんどは国の支援いわゆる国費で大学に通い、卒業後は国が職場を分配（指定）してくれていた。このような改革は中国の歴史上前代未聞であり、私のような大学教員も含めて多くの国民

が改革開放政策の成果を感じ取っていた。当時、大多数の人々は海外、特に先進国のことを知らず、海外留学もまだ国費派遣しかなく、私費留学はなかった。出国人員に対する政治審査は大変厳しく、留学先も個人の選択ではなく国の需要により派遣されていたため、自分が習った外国語の種類とは全く関係がなかった。想像に難くないが、当時海外留学生として選ばれるのは非常に幸運で、誇りに思えることだった。私もその幸運に恵まれた一人で、その年に外国語試験に受かり、さらに政治審査も通過して、衛生部によって晴れて笹川奨学金制度研究者に選ばれ、英語学習者であるにもかかわらず日本の筑波大学に留学することになった。

当時、笹川医学奨学金については留学資金を提供してくれるところということ以外何も知らなかった。しかし、実際に奨学金制度の研究者として留学を経験した後、この制度の精髓を知ることになった。特に私は笹川医学奨学金制度第 1 期生で、また特別研究者制度第 1 期特別研究者でもあり、その後笹川

¹ 孫貴範氏 第 1 期生（1987 年 9 月～1988 年 8 月）、第 1 期特別研究者（1993 年 1 月～1993 年 12 月）筑波大学医学専門学群社会医学系疫学 下條信弘教授のもとで研究。

医学奨学金進修生同学会理事長を 15 年間務めてきたため、この制度が実施されてきた 20 年間を見渡して、奨学生の一員として笹川医学奨学金制度の真髄と深遠なる影響と偉大な精神を深く理解できるようになった。

私達帰国奨学生は同窓会などで集まると、奨学金制度についてたくさんの感想や体験とともに、制度への高い評価と今後の期待についても必ず語り合う。みんな笹川医学奨学金研究者としての誇りをもっているのだ。また、当事者の私達だけでなく、上司から同僚までこの奨学金制度を知っている人々も高く評価している。

まず、笹川医学奨学金制度は全国範囲での実施、単一学科（医学）や領域における助成期間の長さ、助成受益者の全国分布の広さ、育成した人材の多さなど様々な面において中国では空前の規模となっている。さらに、医学医療領域すべての分野から選ばれ、日本での研究機関や指導教官も日本全国各地にある。2007 年末の統計によると、奨学生は延べ 2,000 人以上に達しており、チベット、ウイグル、内モンゴル、海南島などの辺境地区も含む中国大陆のすべての省、自治区出身者を含んでいる。専門は基礎医学、臨床医学、公衆衛生学、予防医学、法医学、歯学、中医学、看護学、薬理学、薬剤学と中医薬学などすべての医歯薬看護専門分野を含めている。規模や期間、育成した人材の量は世界においても他のどの奨学金制度にも負けないと思う。

第二は、笹川医学奨学金制度では実施過程でのヒューマンマネジメントがどの奨学金制度よりも優れている。笹川奨学生全員同じように実感している。語学研修から集団での出国まで、日本に到着時の温かい受け入れから全滞在期間にわたるきめ細かいお世話、留学中の箱根セミナーから集団帰国まで、私達の間では密かに「幼稚園式」と呼んでいた至れり尽くせりの管理である。実際、私達誰もが日本の土地に不案内で言葉がうまく喋れない上に、初めての海外生活のため、このように行き届いた手配はとても必要でありがたいことだ。未だに記憶に新しいのは、同期の一人が研究を始めたばかりの頃、言葉の

問題と文化の違いで研究室の日本人同僚とトラブルを起こした時のことだ。彼が憂鬱に陥り、気持ちが非常に沈んでいることを知った日中医学協会事務局の阿部さんは、すぐに彼の研究室に行って指導教官と話し合い、問題が解決され、その後彼は順調に研究を終わらせることができた。彼が当時の阿部さんの丁寧な導き方を語るたびに、みんな感動せずにいられない。箱根セミナーのこともよく思い出す。日本に入国後半年近く、周りにほとんど中国人がおらず、最初の何か月間は言葉も通じない状況で、一人で研究に打ち込んでいると、孤独とホームシックに苛まれる。それを私達は「出国シンドローム」と呼んでいたのだが、ちょうどそのようなときに箱根セミナーが開かれた。そのときの喜びやリラックス感はおそらく私達にしかわからないものだと思う。皆思う存分に歓談し、歌い、中にはあまりの喜びで眠れなかった人もいた。セミナーでいまだに忘れられないのは日本財団笹川陽平氏の最初の挨拶だった。「奨学金のお金は足りていますか？ 足りない人は手を上げてください！」この前置きはすばらしいものだった。私達の孤独感は一気に吹き飛ばされ、日本財団や日中医学協会の先生方との距離が縮んだような気がした。このような心の通い合いは数え切れないほどあった。日中医学協会と日本財団の事務局の皆さんはヒューマンマネジメント方式を年々改善して、奨学金制度の運営に貢献されているであろう。

第三は、笹川医学奨学金進修生同学会の設立である。帰国した奨学生同士、奨学生と指導教官の間、奨学生と日中医学協会、日本財団との間の交流を促進し、この奨学金制度の精神を永続的にいっそう発展させるために同窓会組織を創設した。同学会の意義については、私自身前理事長として深く体得している。帰国後に日本側の助成により同窓会を設立し、機関紙『笹川生通訊』を発行して情報交換を行ったり、毎年同窓生と日本の指導教官、日中医学協会や日本財団の方々、衛生部の指導者が一堂に会して学術交流会議を行って同窓生の研究状況の報告と懇親会を行ったりしているような活動は、他の奨学金

制度には見られないものである。同学会が毎年貧困地区、被災地等で実施している同窓生によるボランティア診療は、各地で熱烈に歓迎され心から感謝されており、私達自身が帰国後祖国の貧困地区の人々のために力を尽すことができた実感できる。またそれ以上に大切なのは、ボランティア診療を通じて中日両国国民の友情をさらに深められることであると思う。現地の人々は笹川医学奨学金研究者や制度のことを知り、日本財団が惜しみなく中国の人材育成に援助してくださることに称賛と感謝の言葉を述べるのである。さらに、日本財団の支援のもと、同学会は帰国笹川生科学研究助成基金を設けて、帰国したばかりで研究資金を欠いている優秀な若手研究者に僅かながら資金援助をしている。この雪中に炭を送る支援は、その後国家レベル科学研究助成金を獲得するためのスターとなっている。同学会はこれらの活動の実施団体として、奨学生が帰国後もこの制度のもとで交流と親睦を深め、日本の先生方や日中医学協会の方々などと継続して連絡をとることを促進し、そして日中笹川医学奨学金制度の成果と意義を広めていくには最適な組織だと思われる。

春には種を蒔き、秋になれば収穫できる。念入りに世話すれば必ず実が結ばれる。日中笹川医学奨学金制度は中国衛生部、日本財団、笹川記念保健協力財団および日中医学協会の方々の支援のもとで順調に実施され、絶えず改善されてきた。この奨学金によって育成された人材は中国医療衛生事業の発展において積極的な役割を果たし、重大な貢献をしてきた。中国衛生部の統計によると、海外人材育成事業において、日中笹川医学奨学金制度で送出した留学生の帰国率は最も高く、2,000 名以上が全国各地の医療現場の最前線で中核的な役割を果たし、活躍している。その上、大半は各職場で優れた成績を収めて、各レベルの医療衛生機関の専門家や学術分野のリーダーになっている。国家レベルの重大災害や突発的な公衆衛生事件の緊急救助においても、例えば 2003 年 SARS 流行や 2008 年四川大地震などにおいて、数多くの帰国奨学生が救援活動に参加し、表彰までされた。また、一部の優秀な奨学生は各レベル

の政府衛生機関により抜擢され、大学の学部長や病院長、大学校長、衛生庁局長などの指導者になった。特に、中国科学院院士として選ばれた者は 2 名もいる。

私個人の成長と発展を振り返ると、日中笹川医学奨学金で日本に留学できたことが人生の最も大きな転機となっている。日本留学は私の初めての海外経験であり、改革開放初期の頃に、初めて海外の経済発展と進んだ科学技術を体験し、初めて自分の国は後れていると実感できたのだ。同時に、中国は経済発展を中心に、改革開放の道を歩み、国を強くし、国民生活を豊かにするべきだと認識できた。このような感想は私だけでなく、すべての奨学生、特に 2000 年より前に留学していた者はみな同感であると思う。当時の日本の研究先の実験室の設備や実験技術といい、住宅、家電、電話など衣食住を含めた物質的な生活条件といい、国内とは雲泥の差があった。中国で将来快適なマンションや車を持つ生活は想像しがたかった。確か 1988 年の冬、友人の下條先生が瀋陽を訪れ、私が市内を案内していた時のことだった。ダウンジャケットを買うために太源街中興デパートを訪れたところ、一階エスカレーター入り口のところにたくさんの人、特に子供達が集まり、騒いでいた。「このデパートではじめてエスカレーターをつけたので、皆が珍しがって初乗りに来ているのです」と私が説明した。これが歴史というもので、当時の現状である。つまり、留学経験者にとっては、海外の高度経済成長の体験から、技術そのものの学習より、自国の経済発展への期待のほうが大きかった。実際私自身も専門業務関連の研修のほか、日本語を習得し、日本人の中へ融け込み、日本の経済成長の歴史を知るため、日本人の勤勉さを習うために、友達をたくさんつくり、日本留学の成果を最大限に発揮しようと決めていた。20 年経った今日、私は自分の願いを実現させ、たくさんの日本人の友人もできた。1988 年帰国して以来、これらの友人との連絡は絶えることなく今まで続いており、その間、筑波大学、東海大学、聖マリアンナ医科大学、大阪医科大学、金沢大学、旭川医科大学、国立環境

研究所等の医療機関と複数の共同研究を行ってきたほか、私の研究所からも 7 名の研究者を日本に送り出した。私個人も帰国後学術分野においてある程度成果を収めることができ、前後して「国家自然科学基金重点課題」と「国家科学技術攻関課題」を含む各種プロジェクト 10 件以上を担ってきた。おかげでたくさん表彰もしていただき、中国医科大学公共衛生学院の院長として長年務めることができた。これらのすべてがああの日中留学ときいても切れないほ

ど深く関係している。私は日中笹川医学奨学金の援助に心から感謝し、日本留学の経験と日本人から学んできた勤勉の精神を大切にしている。同学会理事長を 15 年間務めた者として、日本財団と日中医学協会の方々、特に笹川陽平氏の同学会への一貫したご支援と励ましに感謝の気持ちでいっぱいである。日中笹川医学奨学金制度のさらなる発展と成果の拡大に期待している。(翻訳：日中医学協会)

懸賞作文・入賞作品

私にとっての日中笹川医学奨学金制度

李天成¹

国立感染症研究所主任研究官



私は山東省内陸部のある村で生まれた。1960 年～1962 年の自然災害の影響で、両親とともに「閩関東（故郷で生活ができなくなった人が東北地区へ生活のつてを求めて行ったこと）」をし、東北の黒竜江省の遼寧で小さいある村に着いて以来、高校卒業までそこで育った。当時の学校の環境は貧弱で、外国語教師は一人もおらず、大学受験のためには苦しいときの神頼みでラジオの外国語講座で日本語を勉強するほかなかった。しかし、そのどうしようもない環境でいやいや習った僅かの日本語が、その後日中笹川医学奨学金制度との出会いの縁を結びつけてくれるようになるとは思っても寄らなかった。そして、その日中笹川医学奨学金こそがその後の私の人生に大きな影響を与えてくれたのだ。

ラジオ講座で習った僅かの日本語を頼りに受けた大学入試で獲得した十何点のおかげで、私はやっと大学本科の合格点に達し、黒竜江中医学院中医系に入学できた。もっと運命的だったのはその十何点

の日本語の成績のために、共通外国語科目は日本語クラスに分けられたことだった。そして、自分の日本語能力に対して過剰な自信を持ち、修士課程卒業後は博士課程への道を放り投げ、迷いもせずに日中笹川医学奨学金の試験を受けることにした。修士卒業後の 2 年目、私は同奨学金の省クラスと全国クラスの両方の試験に順調に合格することができ、1992 年 9 月に第 11 期生として日本の大阪大学に行くことができた。第一志望の東京大学は行けなかったものの、それほど失望はなかった。何はともあれ大阪大学は日本の有名大学であったから。しかも、長春で日本語の語学研修を受けていた時に、日本語教師の強い勧めで見た田宮二郎主演の『白い巨塔』の中の浪速大学のモデルがまさに大阪大学であったからだ。

長春の日本語研修は本当に大変ためになった。特に性格も教授法も異なる 4 名の日本人教師の精力的な教育のおかげで、私の日本語は大きく進歩した。

¹ 李天成氏 第 11 期生（1992 年 9 月～1993 年 8 月）大阪大学医学部内科学第 1 教室 鎌田武信教授のもとで研究。

日本語研修については、現在日本で研究中の 31 期生達と比べて自分は幸せだと思う。第三次制度の日本語研修において日本人教師は一人しかいない上に、授業時間も短いと聞いている。私たちは日本語研修期間中に『白い巨塔』や『東京ラブストーリー』などの名作ドラマと当時流行っていた日本映画を見ることによって、日本に対する認識を深めることができたのである。実をいうと『白い巨塔』より、『東京ラブストーリー』のほうがずっと面白かった。なぜかって、何と言っても気楽でロマンチックな内容だから。残念なのはその後日本での 1 年間は、『東京ラブストーリー』のようなロマンはこれっぽっちもなく、無力感のみ感じていた（少なくとも当時はそう感じていた）。

1990 年代初めは、中国から海外へ行くことはまだそれほど簡単なことではなかった。私は他の奨学生と同じようにこの貴重な海外留学のチャンスを前にして、日本での 1 年間の研究生生活に大きな期待を抱いていた。1 年間でたくさんの新しい知識や技術を勉強して、チャンスがあれば立派な論文を発表し、博士学位も夢ではないし、日本の友人もたくさんできるだろうと期待していた。大阪大学第一内科の消化器研究室の主な研究課題は C 型肝炎ウイルスであった。当時、C 型肝炎ウイルスの全遺伝子が解明されたばかりで、C 型肝炎ウイルスは肝臓になる頻度が高く、輸血後の肝炎の原因ウイルスでもあったため、日本ではかなり注目されていたが、中国では未知の分野であった。卒業後ずっと肝炎ウイルスの研究に従事していた私にとって、このような研究課題はとても魅力的だった。私は憧れと期待を胸に日本で C 型肝炎ウイルスの研究—正確には研修—を始めたのだった。

研究室に入ってはじめて期待とは完全に違う現実がわかった。研究室に行っても指導教官と顔を合わせることができなかった。その後知ったことは私を指導する責任はとっくに下の講師に移され、その講師はまた助手に直接指導責任を任し、助手は私と博士課程の学生と一緒に実験することにくれたのだった。つまり実際は博士課程の学生こそが私の直

接指導教官となったのだった。このように責任のたらい回しをされるとまるで自分が他人のお荷物であるかのように感じざるをえなかった。そうして私は初めて自信を大いに傷つけられた。日本語がすこしできればコミュニケーションはさほど問題ないだろうと思っていたのに、すぐに自分の日本語のレベルではスーパーの買い物程度のお喋りしかできないと気づいた。もっとつらいのは実験室では話しかけてくれる人はほとんどなく、まさに転校生になった気分で他人の楽しい話ぶりを羨ましく眺めているほかなかった。工作中、日本語を使うとしても、キーワードはほとんど勉強もしたことのない外来語だった。それまでの日本語に対する自信はまるで通天閣の頂上から地面にたたき落とされたように、粉々に打ち砕かれた。

そのような状況ではあったが、学びたいこと、やりたいことはたくさんあり、実現しなければならなかった。第一、阪大の技術と設備は当時の中国より遙かに優れているし、多くの実験方法や技術は聞いたことはあっても見たことがないか、見たことはあってもやったことがないことばかりで、学ぶべきことはやはりたくさんあった。幸いにもその博士課程の学生は友好的で真面目だったので、彼の指導と私の努力で、すぐにプライマーの合成、核酸の抽出、増幅、プラスミドの精製、塩基配列の解析など分子生物学分野でよく使われる基本的な実験技能を覚えて、これらの技能を利用して学生の博士論文に必要な実験を手伝い始めた。この段階ではまだ幾分の達成感があったものの、毎日同様の実験を繰り返し、実験技能も博士論文の内容に限定されていたので、すぐに飽きてどうしても漫然とした感じにならざるを得なかった。当時は、自分の独立した課題を持って、実験計画と実施の過程でさらに高いレベルの指導を受けたいと思っていたが、ついに念願が叶わないうばかりでなく、安上がりの実験員として使われたという感覚しか残らなかった。

こうして複雑な心境を抱えながら 1 年が過ぎた。1 年が終わった時には論文発表も学会発表もなく、これといった収穫は一つもなかった。研究室を去る

ときに、手ぶらで帰る虚しさだけが残った。成田空港まで見送りに来ていた日中医学協会の職員と日本語教師と別れる時、手を振りながら「では、また」と言いながら、心中ひそかにもう日本で会うことはないだろうと思っていた。

しかし、運命というのは予測しがたいもので、帰国して1年半経った1995年3月に、偶然にも国費研究員として日本国立感染症研究所を訪れ、E型肝炎ウイルスの研究を始めた。E型肝炎ウイルスとC型肝炎ウイルスは異なる病原体であるが、研究方法と実験技術の応用はほとんど同じで、さらに仕事上ある程度余裕も出てきたので、すぐに軌道にのり、実験も非常に順調だった。2年間足らずで、組換えバキュロウイルス発現システムを用いてE型肝炎ウイルス様中空粒子の作製に成功した。この粒子はネイティブなウイルス粒子に近い構造で、収穫量が多く、精製しやすいうえに感染性がないので、E型肝炎の臨床診断キットやワクチンの開発に非常に優れた抗原材料である。これは当時の世界初だったが、今でも体外合成でE型肝炎ウイルスが作れる中空粒子は少ないのだ。現在、この成果を利用して日中共同研究の形でE型肝炎のワクチンを開発しているところである。この研究業績のため、2002年私は主任研究官として国立感染症研究所の正式の研究員になった。当時の厚生省では初めての外国籍研究員であった。2005年には第30回多谷勇記念ワクチン研究賞を、30年来初めての外国人として受賞した。このほか、E型肝炎ウイルスを研究している間に新しい昆虫ウイルスを発見し、長年未解決のE型肝炎ウイルスの細胞培養システムの構築が可能となり、E型肝炎ウイルスの複製と病理を明らかにする扉を開くことができた。

日中笹川医学奨学金の研究生活はもう10年以上も前のことになるが、振りかえってみると、感染症研究所での成績は、実は大阪大学で笹川医学奨学生として研修した時に築いた基礎があったからこそ獲得できたのだとつくづく感じる。もしその1年間の研修がなければ、もちろんあれほど多くの実験技術や忍耐力を得ることもなかったであろう。奨学生時

代の経験があればこそ、現在のすべてがあるのだ。何年も経った今、私はやっと阪大での1年間の研修の真の価値を理解できるようになった。第一に、日中笹川医学奨学金制度は外の世界を見る扉を開けてくれて、私の視野を広めてくれると同時に固定観念も変えてくれた。第二に、この制度は進んだ知識と技術に出会う機会を与えてくれた。広い視野と新しい概念に先進的な知識や技術が加わって、自然と成功の確率が高まったのである。さらに重要なのはこの奨学金制度が様々な環境に適応する絶好のチャンスと場所を与えてくれたことである。奨学生としての1年間は精神面でも知識面でも鍛えられた1年であった。当時の環境と時代背景のもとでは、日中笹川医学奨学金制度がなかったら、たぶん海外に出るチャンスは当分なかったろうし、現在の私もなかっただろう。

私自身の日中笹川医学奨学金制度への認識は、憧れから失望へ、失望から再認識へ、そして認可へという紆余曲折を辿ったのであるが、国立感染症研究所で勤務した十数年間に、十数名の笹川医学奨学生に出会い、直接指導した者も何人かあったので、別の角度からこの制度を見ることができた。当時の失望の原因を分析してみると、受け入れ機関と指導教官の経験不足と認識不足もあったが、私自身の積極性が足りなかった面もあったと思う。仮に指導教官が奨学生に独立した研究課題と明確な方向性を提示し、且つ意識的に周囲との交流の機会を設けてくださったのであれば、たぶん私が遠慮しなくてもっと積極的に周囲と交流していれば、みんなと付き合いやすさがあり、もっと充実感を得られたのかもしれない。もう一つの原因は、成果を焦るあまり、目の前の損得しか見えなくなっていたことである。目に見える形の成果のみを追いかけて、耳で聞き目で見えた見聞や経験こそが無形の豊かな奥深い価値のあることとは気づかなかったのである。

現在、日中笹川医学奨学金制度は第三次制度になり、毎年30人の新しい奨学生が来日している。時代も変わり、中国の経済と技術が急成長したことによって、今の奨学生は知識や技術レベル及び考

え方は十数年前とはだいぶ違うが、指導教官や周囲の人々との付き合いにおいては、やはり私達が抱えていた悩みと同じような悩みに出会い、私達が経験していた問題と同じような問題を経験すると思われる。もし私達経験者の教訓を伝えられれば、彼らは少しでも遠回りしないで済むだろう。2006 年、日中医学協会のサポートのもとで、在日笹川生経験者達の努力により自発的に日中笹川生連絡会を設立した。連絡会の目的は、新しく来日する笹川医学奨学生のために生活と研究の両面において様々なサポートをし、相談に乗り、研究生活をもっと充実させていく手伝いをする事である。今後來日する笹川医学奨学生一人一人が、研究室という大きくもなく小さくもなく、社会全体を凝縮している空間にとけ込み、1 年間の研究生生活を楽しく送れるように心から祈っている。同時に、もっと多くの在日笹川生経験者が連絡会に参加して、活動を広げていきたいと思っている。

20 年来実施された日中笹川医学奨学金制度は中国の医療衛生事業のために多くの人材を育成してく

れたと同時に、この制度のお蔭で中国医療衛生領域の先頭に立って活躍している笹川医学奨学生同士の関係が緊密になり、パワーのあるネットワークで繋がっている。これこそ一番の財産である。近い将来、このネットワークの影響力がさらに発揮され、いっそう優れた成果があげられると信じている。このネットワークが最大限有効にその力を発揮できるように、笹川医学奨学生 OB の一員として日中笹川医学奨学金制度が末永く継続するように心から願っている。そして、この制度が中国医療衛生事業のために人材育成を行っていくと同時に日中両国間で一段と高レベルの共同研究プロジェクトを展開することによって、帰国した笹川医学奨学生 OB たちが両国の架け橋になれるような機会を与えてくれることを願っている。このようになってこそ、日中笹川医学奨学金制度を大切に育ててくださった日本財団、日中医学協会、笹川記念保健協力財団及び中国衛生部の方々へ最高のお返しができるのだと思っている。(翻訳：日中医学協会)

懸賞作文・入賞作品

私にとっての日中笹川医学奨学金制度

銭玉秀¹

暨南大学附属第一医院手術室看護師長、主管看護師



1997 年 4 月、桜がきれいに咲いている季節に私は憧れの京都を訪れ、1 年間の研究生生活を始めた。短い 1 年間だったが、生活や仕事に対する考え方等を含めて、その後の私の人生に大きな影響を与えてくれた。日中笹川医学奨学金について語るたびに、未だに強烈な帰属意識が湧き上がってきて、まるでこの奨学金制度が栄養となって私の血となり肉と

なったようだ。日中笹川医学奨学金制度により私は夢を実現する場を与えられ、中日両国の民間友好交流について身をもって一層深い体験ができたのは、笹川良一先生のお志のお蔭と心から感謝している。

1984 年看護学校卒業の時、中日関係の改善により一時日本語を習うのがブームとなっていた。みんな隣の国日本の状況をもっと知りたがっていたの

¹ 銭玉秀氏 第 20 期生(1997 年 4 月～1998 年 3 月) 京都大学医学部附属病院看護部 仲朝子部長のもとで研究。

だ。周りの影響を受け、私も漠然とした情熱をもって長く厳しい日本語の勉強生活を始めた。日本語教育は当時の中国では始まったばかりで、学習条件や教材は粗末なものしかなかった。最初はラジオでいうえお五十音を習うしか方法がなく、指導してくれる人がなく、大変苦勞した。その後月給の半分を払って「上海」ブランドのラジカセを買い、毎日テープを使って繰り返し練習できるようになって、楽しくなってきた。その情熱をもって、独学をずっと続けていた。誰にも分からない苦勞もあったが、一方で大きな楽しさもあった。一つの言葉を通じて、日本という国の文化と歴史を知ることができたのだ。

私の故郷は南京の近くにあり、小さい頃から中日間の深い感情の亀裂を知っていた。70 歳を過ぎた母親は戦争中に辛い経験をしたので、私が日本に留学するために日本語を習っていることを知ったとき、賛成してくれなかった。自分に辛い思いをさせた国に娘を行かせたくなかったのだ。しかし、その時の私は若さの故からか、本当の日本を知りたかったのか、深く考えもせずに衛生部の選抜試験に申し込んだ。長年の独学の努力がやっと報われ、一回目の試験で合格し、笹川医学奨学金をいただき、青年時代からの夢が実現したのだ。その時の感動は今思い出しても夢のような感じがする。

研究先は京都大学附属病院だった。京大を選んだのは、これまで日中関係がもっとも良好であった時代の日本の都が京都であったからだ。京都にいれば唐代に遡る中国と日本の長い交流関係が見えてくると思った。桜が満開の季節に京都に着いた時、指導教官自ら駅まで迎えにきてくださった。駅を出るやいなや、桜に包まれた京都の景色に感動した。桜の花の中に低層の屋敷が見え隠れして、京都を南北に貫く鴨川はきれいな川音を立てながら軽やかに流れ、川底が透けて見える清水であった。あまりの美しさに打ち震えた。初めてこんなに綺麗で壮観な桜の景色に出会い、私は側にいる先生も忘れるくらい茫然としていた。朦朧とした中、先生がタクシーの運転手さんに「鴨川にそって、京都で一番桜が綺麗なところをゆっくり走りましょう」というのを聞いて

た。胸は感激でいっぱいであった。到着した日、先生と看護部副部長に日本の懷石料理をご馳走になった。しかし、思いも寄らずに夜中になってお腹が急に痛くなった。それは生ものを食べる習慣がないためだった。その後病院の研修で、先生はちゃんとこのことを覚えていて、昼には自炊するために宿舎に帰らせるようにと手術室の看護師長に頼んでくださった。先生の行き届いた心づかいは、本当に思いも寄らないことであった！ 日本人はみんな善良であり、戦争こそが悪魔で、人の理性を奪うものだと思った。

中日両国間の文化の差もあり、初めての海外経験でもあったため、大きなカルチャーショックで私はほとんど自分を見失い、いかに適応していくか困っていたが、手術室の職員達は最大の忍耐と親切心を持って私を指導してくれた。私がホームシックになるのを心配して休日になると、独身の看護師がいつもみんなの遊びや集まりに誘ってくれていた。先生にも一度歌舞伎に誘っていただいたが、京都に行っただけの頃で関西弁に慣れず、約束の場所を間違えた上に、連絡用の携帯もなかったのも、結局行けずに終わったのはとても残念だった。しかし、このことは今思い出してもほのぼのとした気持ちになる。

京都の町を優雅に歩く和服姿の女性をみると、思わず注目してしまう。ほんとうにすてきな風景だった。1998 年新年、私に着物の体験をさせようと、赤沢看護婦長は成人式に着た着物を貸してくれた。彼女とその友達は長時間かけてピンク色の着物を着せてくれたが、着付け専門家でなかったせいか、私が呼吸できなくなるのを心配して帯をきつく結ばなかったせいか、着物はすぐに崩れ、初詣には着ていけなかった。しかし、ずっとみんなが熱心に一生懸命やってくださり、その日は結局長時間にわたって着付けしていたため、少し風邪を引いて胃痛も起きたが、心からの感謝の気持ちはすこしも変わらなかった。普通の日本人である彼女達の情熱が私の悩みを解決してくれたおかげで、その後すぐに日本の生活に慣れ、みんなと溶け込み、愉快的研究生活を

送り、楽しい思い出をたくさん作ることができた。

宿舎の近くに小学校があり、ベランダから運動場を見下ろすことができた。冬に子どもたちが短パンで運動しているのをみると、母性本能で子どもたちが寒いのではないかと心配になる。どうして日本の親は子供にこんな薄着をさせるのだろうか？ 後から日本の教育文化のひとつだとわかった。子どもに厚着をさせると運動力が低下すること、寒いので体を動かしたくなり、身体を鍛錬することになる。学校の体育活動の多くが集団行動で、心をひとつにして協力しなければならず、小さい時から団体行動の精神を養い、集団に溶け込むように訓練している。

日本の看護師はルールや規定を、ひとりひとり自律してまじめに法律を遵守するように守っている。上司がいらないからと言って仕事を簡略化することもないし、自分の責任範囲内のことは決して他人に頼まないし、自分の仕事の手落ちで他人に迷惑をかけることもなかった。与えられた仕事は必ず残業をしても質と量とも保証できるようになるまでやり続けている。

先生達とお付き合いしているうちに、本当の日本を知るようになった。私達は似たような伝統文化をもっており、文字も同じようなものを使っているにもかかわらず、心のあり方や考え方においてはやはり大きな差がある。日本の看護師の責任感とプロ意識は私にとって一生忘れないものだった。私達は患者を身内として扱うように唱えているが、とても難しい目標だと思う。その一方で、日本の看護師は患者をお客様の一人として扱っているが、患者の権利を尊重し、患者の個人情報を守っているほか、患者の苦痛を最大に減少するよう、サービス業最高の基準に基づいて医療サービスを提供している。中国の看護師のような優越感を持っていないことが衝撃的だった。

このプロ意識は私の仕事に対する考え方をえてくれた。帰国後このような意識は私の身体のスミズミまで浸透し、患者のためにもうすこしできないかと常に自分に問うようになった。日本では、患者が朝手術室に入るとき留置チューブやカテーテルは一

つもつかず、すべての手術操作は麻酔後に行われるため、患者は痛みを感じずに手術を受けられるのだ。しかし、中国の現状では手術を受ける患者の術前胃管や尿管はすべて病棟で事前に行われ、病院側に特別な知人がいない限り、手術室でこれらの操作を受けることができないのだ。これにより、患者の朝の睡眠時間が奪われるだけでなく、ひどい痛みも伴うのだ。帰国後私は日本で学んできた方法を自分の仕事に取り入れた。はじめの頃は仕事の量が増え、それまでの仕事の流れが乱されたがゆえ、同僚達から冷たい目で見られたが、根気強く説明を繰り返しているうちに、みんなも看護師としての役割を理解し直し、患者の立場で考えることができるようになり、また仕事の流れをより効率化することや同僚に明確な導きを与えることによって、仕事の方式が順調に切り替わり、患者がほんとうにメリットを得ることができた。

病棟の管理も見習うべき点が多く、一つは専門的な仕事は専門分野の人により行われ、例えば事務員を雇い、各科室の医療技術関連以外の仕事はすべて事務員に頼むことによって、コストの削減はもちろん、患者のための看護師の時間を確保できたのだ。それからは看護師は患者の基本的な生活面のお世話を大切に、毎朝患者のお風呂を手伝っている。これによって患者はいやな匂いをせずにいつも清潔で快適にいられ、基本的な人権も守られている。これも当時の私に大きな衝撃を与えてくれた。というのは患者の側には家族がいないうえに、中国とは違い訴えるひともなく、医者からの要求でもないにもかかわらず、看護師はすべて当たり前のようにやりこなしていたからだ。彼女達はナイチンゲールの精神で黙々とヒューマニズムを看護の細部にまで注ぎ込んでいたが、中国ではまだ提唱する段階に止まっている。両国の看護の環境はひどく異なっていたため、戸惑いのあまり、ある日「看護という職業を選んで後悔したことがありますか」と日本の看護師に質問したが、その回答に啞然とした。「人間にとって命は最も大切なものです。人生は一度しかないのに、看護はその人の命の管理に参加し、患者の健康の回

復のお手伝いをする仕事です。これより価値のある仕事はないでしょう」と言った。その聖女のような純真な考え方に基づく言葉は、その後私が心から看護という職業を愛し、看護の楽しみを感じられる源泉となっている。

一人の女性として、日本社会における女性の役割について日本の看護師と話し合ったことがある。当時私はすでに一児の母だった。息子はまだ4歳で幼く最も母親を必要としている時期だった。幼稚園に通いはじめた息子は毎日側にいてくれた母親がもうすぐ遠くへ行き、毎日顔も見られなくなるとわかると、「お母さんは遠くへ行っちゃうの、僕を捨てて行っちゃうの」と幼稚園の先生に言った。母親としてこのようなことを聞いたら心が刺されるように痛んだ。しかし、勉強のために、幼い子供を夫に託し、単身で日本に来たのだ。日本の看護師は私の話を聞くとみな不思議そうな顔をするとともに、羨望の眼差しであった。彼女達が理解できないのは母として幼い子供を残してなぜこんなに遠くまで来られたのかということだ。また羨ましがるのは中国の男性が一人でも子育てを引き受けてくれる優しさだった。まさに中日両国の家庭内の役割分担の違いである。日本ではいくら優秀な女性でも、一旦結婚すると、キャリアを終わらせて専業主婦になるものと上司から勝手にイメージ付けられ、上司から「そろそろ家に戻ったほうがいいんじゃない」といろいろな暗示が出されるのだ。家庭と仕事の両立は昔から日本

女性の願望であるが、私が会った看護師はやはり独身が多かった。これは私にとって理解しがたいことで、結婚と家庭は人生の重要な部分であるのに、どうして日本ではこんなに手が届かなくなっているだろう?! 私は自分が幸運に恵まれ、中国に生まれて良かったと思う。中国では男女平等で、同じように働き、同じような報酬をもらい、家事は夫婦分担が当然のこととなっている。だから私は海外留学に行けたし、それを機会に簡素で平凡に見える家庭生活をもっと大切にするようになったのだ。

日中笹川医学奨学金制度を通じて、両国の文化の差についてより深い理解ができたほか、さらに高い角度から異なる物事を見ることができ、視野や考え方を広げ、違う考え方を持つ人間を許容することができるようになった。大変うれしく思っていることは今でも日中笹川医学奨学金制度が続いており、従来通り積極的な役割を果たしていることである。このような民間の友好関係は世々代々にわたって伝わり、永遠に続くよう祈ってやまない。今回の懸賞作文の機会をお借りして、日本の看護師への敬意を表すとともに、日本滞在中にいただいた多大なご協力やご親切について感謝の意を表したい。日本の看護師たちが私の人生観を立て直してくれた。日本の看護師のみなさまがこれからの人生で愛する人を見つけられ、悔いのない人生を送られるようにお祈りしている。(翻訳：日中医学協会)